

令和 元年 6 月 13 日現在

機関番号：30107

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16774

研究課題名(和文)『苔の衣』諸伝本の本文研究及び校本作成

研究課題名(英文)The text study, and making a variorum of "Koke no koromo"

研究代表者

関本 真乃 (Sekimoto, Masano)

北海学園大学・人文学部・講師

研究者番号：30760011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：『苔の衣』の十数本を電子テキストデータ化した。前田家本系統には異同が少なく、穂久邇文庫本系統の諸本に比較的大きな異同が見られることに着目し、二冊本諸本及び巻三零本は穂久邇文庫本(完本)と近い関係にあること、絵巻本文は二冊本に拠るだろうことが判明した。また、三冊本は二冊本及び巻三零本に拠ったものと考えられる。

つまり、穂久邇文庫本系統の諸本は、A黒川四冊本、B龍門文庫本・盛岡公民館本の一類()と、穂久邇文庫本・島原松平文庫本・絵巻の一類()に分かつことができた。黒川四冊本は前田家本に近い本文をも有する点で西園寺文庫本と共に着目され、穂久邇文庫本系統の本文は 系統も重視すべきである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『鎌倉時代物語集成』及び『中世王朝物語全集』といった手に取りやすい本文はいずれも、前田家本系統の本文を底本としており、穂久邇文庫本系統の諸本の本文については、翻刻も少なかった。最近の調査で報告された穂久邇文庫本系統諸本について翻字を行い、一部は翻刻として広く社会に公開した。その結果穂久邇文庫本系統の諸本について諸本分類を改める必要があることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study produced more than a dozen electronic texts of "Koke no koromo". I focused on there are a few differences between the texts of Maedakebon line, and many differences between the texts of Honokunibunkobon line. As a result of this research, it was found that the text of the manuscripts transcribed in two volumes (that corresponds to volume 1,4) is close to the Honokunibunko-bon manuscript, and the text of the manuscripts corresponds to volume 3 is also close to the Honokunibunko-bon manuscript. In addition, the text of Emaki is based on the manuscripts transcribed in two volumes.

The texts of the Hnokunibunko-bon line are classified into two categories.

Furthermore, the first category is divided into category A (Kurokawayonsatsu-bon) and category B (Ryumonbunko-bun and Moriokakouminkan-bon). It is remarkable that the text of Kurokawayonsatsu-bon is partially similar to the text of Maedake-bon line.

研究分野：日本文学

キーワード：国文学 苔の衣 中世王朝物語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

『苔の衣』は鎌倉時代中期、いわゆる後嵯峨院時代に成立したとされる作り物語である。その現存諸本は、現在およそ三十本に及ぶ。写本は中世王朝物語にしては多いが、その殆どが江戸期の書写であり、久曾神昇以来、類穂久邇文庫本系統と、類前田家尊経閣本系統に大別される。久曾神は穂久邇文庫本について古典文庫解題で「室町時代中期永正頃の書写」と推定し、「第一類と第二類とは、意識的に改められたところもあらうと思はれる」とした。以後、今井源衛は「穂久邇文庫本なるものは、前田本系の本文に注釈的敷衍的改作をほどこして生まれた」（『王朝物語の終焉』、『國語と國文学』第41巻第10号、1954年10月）とし、豊島秀範も「伝本の経路としては、前田家本系が原形に近く、その改作本が穂久邇文庫本系であると見られている」（『苔の衣物語』、『体系物語文学史第四巻』、有精堂出版、1989年）と述べるが、この両系統の先後および本文の優劣についての詳細な検討は見られない。

『鎌倉時代物語集成 三』の解題は穂久邇文庫本系統について、「本文的にすぐれていると見られる点が多いと見られるものの、中には冗長に引き延ばした表現かと疑われるところも少なからずある。」とし、前田家本系統の本文について「本文節略の傾向が顕著ではあるが、一概には優劣を定めがたいところがある」とする。優劣についての結論は現在に至るまで概ね持ち越されている。

また、『鎌倉時代物語集成』及び『中世王朝物語全集』いずれも、前田家本系統の本文を底本としている。しかし、優劣・先後についての結論が出ていない現在、穂久邇文庫本系統の諸本の本文にもついても詳細な検討が必要であると考えた。

2. 研究の目的

宮田京子は「前田家本系統の諸本間には、常に異同がはなはだ少ない」ことを指摘した上で、伊達本の優れていることを述べている。一方、穂久邇本系統については、前田家本系統と比較し、「両系統間にはかなり激しい異同があり、特にしばしば長文にわたるものがある。（中略）その多くは誤脱によると認められるけれども、中にはそうではなく意識的な改変や潤色と見られる物も多い」（『中世王朝物語全集』『苔の衣』解題、笠間書院、1996年）とするのみで、穂久邇文庫本系統の諸本文については立ち入らない。

また、穂久邇文庫本系統の諸本については、絵巻本文を龍門文庫本と穂久邇文庫本と比較した麻原美子（『『苔の衣』絵巻の研究と本文（一）』、『日本女子大学紀要（文学部）』36号、1987年）以外に目立った研究は見当たらない。最近の調査で報告された諸本もあるので、主に穂久邇文庫本系統の諸本について、可能な範囲で書誌調査を行い、翻字及び電子テキストデータ化作業を行う。そのうえで改めて諸本分類を試みる。

3. 研究の方法

現在確認できる穂久邇本系統と言われる諸本を外題と共に内容別に分類し、可能な範囲で書誌調査・翻字作業を行った。翻字作業を終えた本文を巻ごとに比較し、特徴を分析した。既に翻刻等があるものには下線を付す。写真版で見たものには波線を付す。

【完本】

四巻（一～四） 穂久邇文庫蔵本「莓衣物語」・黒川文庫蔵四冊本「こけの衣」
四巻（春～冬） 盛岡市中央公民館蔵本「こけの衣」
三巻（上中下） 龍門文庫蔵本「苔の衣」（上巻が巻一・二に相当）

【巻二を欠く】（三巻）

三巻（上中下） 京都歴史資料館蔵本「苔ころも」・金沢大学蔵本「苔ころも」

【巻一・四相当】

二巻（上下） 島原松平文庫蔵本「莓衣」・神宮文庫蔵本「こけ衣」
青山歴史村蔵本「こけ衣」
内閣文庫蔵本・上越市立高田図書館蔵本「こけころも」
一～九巻 戸沢家旧蔵絵巻

【巻三相当】

島原松平文庫蔵本「宇治物語」
彰考館蔵本「宇治大納言物語」 未見
東京大学文学部国文学研究室蔵本「苔の衣」
天理大学附属図書館蔵本「宇治大納言物語」
上越市高田図書館蔵「宇治もの語」 未見
続群書類従一八輯上「宇治大納言物語」

【巻二相当】

浜口博章氏蔵本

【巻三・四相当】

立命館大学図書館西園寺文庫蔵本「こけ衣」

なお、浜口博章氏蔵本及び立命館大学図書館西園寺文庫蔵本については、穂久邇文庫本系統とも前田家本系統とも定めがたい。両者の混淆本文であるか、それとも両系統が分かれる以前の中間本文であるか、現段階では断定できないので、今後さらなる検討が必要である。

4. 研究成果

まず、巻一・四に相当する本文を有する～を比較検討したところ、島原文庫本と内閣文庫本、高田図書館本は非常に緊密な関係にあり、それらに対して神宮文庫本・青山本があると考えられる。に蔵書印がある榊原忠次、林鷲峰、肥前松平藩主となった松平忠房の三者は互いに親しかった(竹下喜久男「好文大名榊原忠次の交友」、『鷹陵史学』17号、1991年)ことからすると、島原文庫本、内閣文庫本、高田図書館本はいずれかが所持した本を貸し借りして書写した可能性は高いと言えよう。

また、絵巻本文については、麻原が「従って古本系伝本として二類に分かつことができ、一類は龍門文庫本、穂久邇文庫本であり、もう一つは絵巻本文と見ることができる」としていたが、絵巻本文は確かに他の上下二冊本諸本と比較すると独自異文が多いが、それらのうちおよそ三分の一は、絵巻にするにあたっての本文の変更であると考えられ、残りも、呼称の読み方の変更や本文の読解の誤りによるものが多く、絵巻が正しいと考えられる独自異文は五箇所程度に過ぎない。上下二冊本の一本と位置づける方が妥当であろう。

また、巻二を欠く京都歴史資料館蔵本(賀茂季鷹の識語があるため、以下賀茂季鷹本と呼称する)及び金沢大学本であるが、この両者の本文は極めて近似している。一面行数に始まり、筆跡、行配り、字母ともほぼ一致し、両者の間には深い関係があることが想定される。注目されるのは、両者の中巻(内容は巻三に相当)の筆跡が酷似し、かつ、それぞれの上下巻とは筆跡が明らかに異なる点である。さらにいえば、賀茂季鷹本と金沢大学本の上下巻の本文は、上下巻のみの諸本(から)と関係が深そうであり、中巻の本文も完本(から)よりも、巻三のみの諸本(から)と近似する。ここからは、賀茂季鷹本・金沢大学本と、からの諸本、及び巻三のみの諸本との関係が示唆される。

完本のから、および上下二冊本の本文について、まず巻一本文について検討したところ、龍門文庫本・盛岡公民館本は非常によく似ており(盛岡公民館本は脱落が数箇所ある)黒川四冊本もこの二本に似ている類似するが前田家本と一致する箇所も散見する。それに対立する本文として、穂久邇文庫本・島原文庫本、絵巻本文があることがわかった。巻四についても概ね同様の結果が得られた。

巻二については、巻一ほどの大きな異同は見られない。穂久邇文庫本、黒川四冊本、龍門文庫本と盛岡公民館本の三種類に分類できる。

巻三は、巻三のみの諸本について、島原松平文庫本、群書類従本は非常によく似ており、東京大学本もこの二本によく似ている。巻三についても、黒川四冊本、龍門文庫本・盛岡公民館本と、穂久邇文庫本・島原松平文庫本・巻三のみの諸本に分かつことができよう。

つまり、穂久邇文庫本系統の諸本は、A黒川四冊本、B龍門文庫本・盛岡公民館本の一類()と、穂久邇文庫本・島原松平文庫本・絵巻の一類()に分かつことができよう。

以上の穂久邇文庫本系統の諸本分類については、論文化を急ぎたい。

ただし、本文の優劣と、写本の書写年代の古さは必ずしも一致せず、たとえば、書写者が誤った本文を忠実に写すのではなく、独自に校定した可能性もある。本文の内容からして「こうあるべき正しい」本文であるからといって、それが元々の形であったとは限らないため、どちらの系統が本来のものであり、いずれの諸本が優れているのかについては、巻ごとに一貫していないようでもあり、さらなる検討が必要である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

関本真乃「金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻(一) 京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照」『京都大学国文学論叢』39号、2018年、pp43-64、京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室

関本真乃「金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻(二) 京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照」『京都大学国文学論叢』40号、2018年、pp27-48、京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室

関本真乃「金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻(三) 京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照」『京都大学国文学論叢』41号、2019年、pp57-70、京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室

[学会発表](計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
該当なし

〔その他〕
該当なし

6. 研究組織

(1)研究分担者
該当なし

(2)研究協力者
該当なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。